

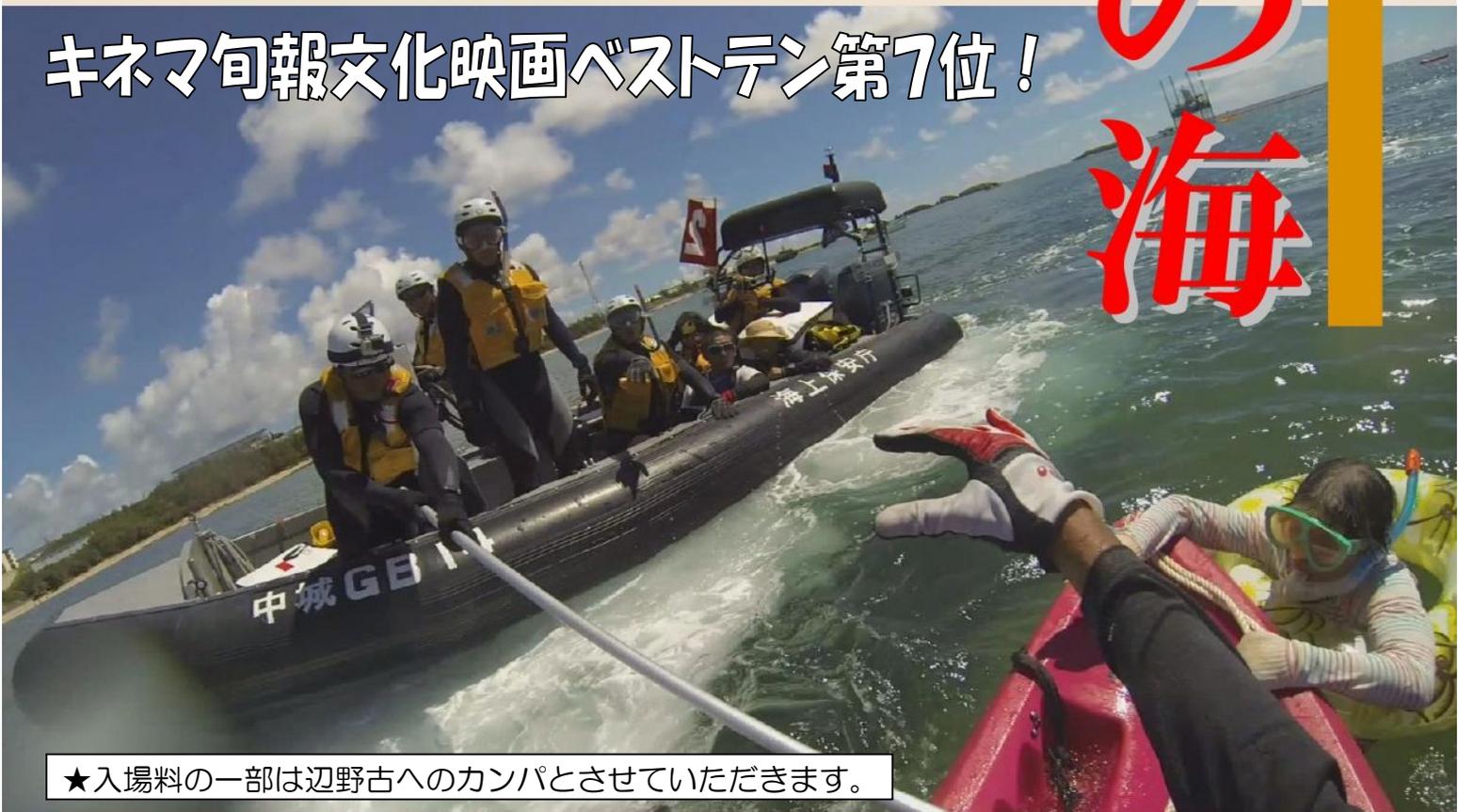
完成版一〇九分

沖縄・辺野古 圧殺の海

2014年7月1日、安倍首相が集団的自衛権を閣議決定した同日に、辺野古の新基地建設が着工された。巡視船やゴムボート、特殊警備艇、警戒船など、最大80隻にもなる船で埋め尽くされた辺野古の海。反対する人々を力ずくで抑え込みながら、有無を云わさず工事をすすめる日本政府。海で、基地のゲート前で、毎日、激しい攻防が続けられているが、本土のマスメディアの体温は今までになく低い。

周到に築き上げられてきたこの無関心の壁に穴を穿って、辺野古の闘いの“いま”を伝える自主制作の映像が届けられた。現地で闘う市民たちと森の映画社が協力して作り上げたドキュメンタリーである。炎天下の日中も、台風前の雨の中も、ゲート前に座り続ける人びと、両手を広げて工事用のトラックの前に立つおじいやおばあたち、体一つで力ヌーで海へこぎ出す人びとの魂の熱量がそのまま映し込まれているこの映像は、軍事大国への兆しの時間に、日本人が向き合うために世に送り出された。

キネマ旬報文化映画ベストテン第7位!



★入場料の一部は辺野古へのカンパとさせていただきます。

藤本幸久 影山あさ子共同監督作品 2015年/森の映画社/109分

撮影:栗原良介 藤本幸久 影山あさ子 比嘉真人/ 水中撮影:牧志治 相馬由里/ 編集:栗原良介

音楽:the yetis/ ナレーター:影山あさ子/ 題字 槇冬董/ 映像提供:北限のジュゴン調査チーム・ザン ヘリ基地反対協

「圧殺の海」上映案内(森の映画社札幌編集室) ⇒ <http://america-banzai.blogspot.com/>

3月9日(月) 横浜上映会

上映 [第1回]13時半開場 14時上映 [第2回]18時開場 18時半上映

会場 横浜市技能文化会館 8階 802(横浜市中区万代町2丁目4番地7)

入場券 **1000円** (中高生 **500円**)

[連絡・問合せ] 沖縄の自立解放闘争に連帯し反安保を闘う連続講座

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/> 携帯 090-4822-4798

後援 基地撤去をめざす県央共闘会議/自治労横浜市従業員労働組合



辺野古を撮り続けて

共同監督 藤本幸久・影山あさ子

私たちが辺野古を撮り続けて、10 年になる。この間、「Marines Go Home」と「ラブ沖縄」という2本のドキュメンタリーを世に送り出した。

2014 年 7 月 1 日、辺野古の新基地建設が着工された。

沖縄県民は、何度、NO の声をあげたことだろう。あらゆるデモクラシーの手段を尽くして。しかし、ついにその声を日米政府がかえりみることはなかった。

警察・機動隊、海上保安庁を前面に立てて、反対する人たちを力ずくで抑え込みながら、工事をすすめる日本政府。巡視船やゴムボート、特殊警備艇、警戒船など、最大 80 隻にもなる船が、辺野古の海を埋め尽くす。おじいやおばあたちは、「まるで、沖縄戦当時のよう」と言う。

海底の調査を地上の作業で代替するというインチキなボーリング調査。海に勝手な制限ラインを設定し、報道機関の船も遠ざけ、連日、幾人ものカヌー隊員を拘束し、排除を続ける「海猿」海上保安官たち。ゲート前でも機動隊は、報道機関も排除し、怪我人を出すほどに猛り狂う。

しかし、たたかいは続いている。炎天下の日中も、台風前の雨の中も、ゲート前に座り続ける人びと。両手を広げて工事用のトラックの前に立つおじいやおばあたち。カヌーに乗り、体一つで海へこぎ出す人びと。屈しない人たちがいる。8月23日には3600人、9月20日には5500人。辺野古に集まる県民も日増しに増えている。

ブイがおかれ、立入禁止と書かれたフロート（浮具）で仕切られ、真黒なゴムボートが浮かぶ物々しいキャンプ・シュワブ沿岸。彼らのゴムボートが走り回る真下に、ジュゴンが海草を食む藻場がある。日本人同士の衝突をよそに、キャンプ・シュワブの浜では米海兵隊の水陸両用戦車が走り回り、フロートの近くで、海兵隊員たちはシュノーケリングに興じている。

2014 年 11 月 16 日、沖縄の人たちは、新基地建設 NO を掲げる翁長雄志氏を県知事に選んだ。

日本政府は、またしても、沖縄の民意を圧殺しようとするのか。あるいはそうさせないのか。

ここに造られようとしているのは、普天間基地の代替施設、ではない。耐用年数 200 年、オスプレイ 100 機、揚陸強襲艦が運用可能な最新鋭の基地だ。

この海は、誰のものなのか。

安倍政権が目指す「戦争する国」づくりの最前線・辺野古。私たちは、今日も、そのど真ん中で、カメラを回し続けている。中央メディアが取材に来ない沖縄、地元メディアも排除される辺野古。周到に準備された「無関心の壁」に一穴を穿ちたい。私たちの未来の行方が、封じられ、圧殺される前に。

